菊池川流域

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

豊かな土壌をつくってきた菊池川

「天然クーラー」と称される

滝の形もさまざま

秋の菊池渓谷

菊池川と菊池渓谷

菊池川

阿蘇北外輪山から有明海へと西流する菊池川は、総延長71キロ、流域面積996平方キロメートルの一級河川です。高低差が少なく、特に山間部から菊池市隈府市街地に至るまでに高低差の大部分が消化されてしまうため、隈府市街地から玉名市の河口までの流れが、非常に緩やかになっています。

菊池川は、豊かで清らかな水と肥沃な土壌をもたらし、特に中流域の菊池から山鹿にかけて広がる「菊鹿盆地」や下流域の「玉名平野」は、古代から米の一大生産地となっています。

物流の大動脈としても県北地域に欠かせないものであり、水運を利用して中央や海外と米や物産の取り引きが盛んに行われてきました。

菊池渓谷

菊池渓谷は、菊池川の源流の一部で菊池市街地から東へ約17キロ、阿蘇外輪山の北西部の標高500メートル～800メートルの間に位置し、約1193ヘクタールの広大な面積を誇ります。

阿蘇くじゅう国立公園の一角をなし、うっそうとした天然生広葉樹で覆われ、大小さまざまな瀬と渕と滝があります。変化に富む渓流と美しい森林がおりなす景色はまさに絶景。日本森林浴の森百選・日本名水百選・日本の滝百選などに選ばれ、西日本有数の景勝地として全国の写真家に人気の高い場所です。

夏でも平均水温は13度と低く、避暑地として最適で、毎年多くの観光客や地元の人たちが訪れます。夏だけではなく、春は新緑、秋には紅葉、冬は全山に霧氷の花が咲くなど、四季を通じて訪れる人々の心を和ませてくれます。

菊池川流域の人々は、菊池川を活用しながらも、自然と景観を守りつつ、菊池川に寄り添って生きてきました。二千年の米作りの歴史は、菊池川とともに生きてきた人々の歴史そのものです。

（担当：菊池市生涯学習課）

Japan Heritage

菊池川 日本遺産 検索

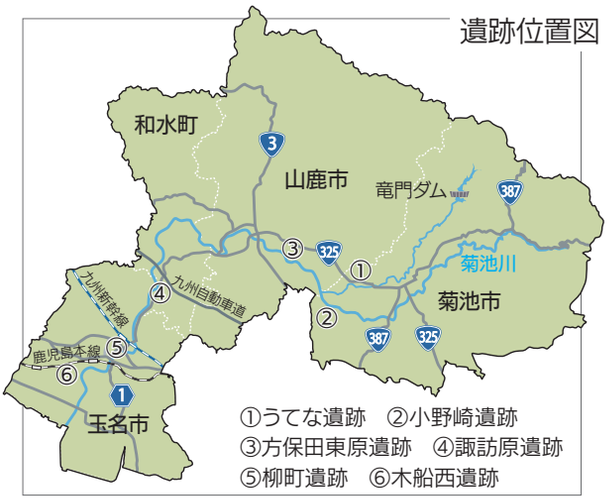
菊池川流域

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

③方保田東原遺跡全景



破鏡（⑥出土品）

木製二又鍬（⑤出土品）

石包丁型鉄器（③出土品）

鉄器群（③出土品）

菊池川流域、米作りの曙①

弥生時代の大集落遺跡群

弥生時代には各地で米作りが始まり、米作りに適した土地であった菊池川本流や支流の周囲でも盛んに作られました。

米作りにより豊かになった集落は次第に大きくなり、地域の中心となるような大集落が営まれるようになります。菊池市のうてな遺跡や小野崎遺跡、山鹿市の方保田東原遺跡（国史跡）、和水町の諏訪原遺跡、玉名市の柳町遺跡や木船西遺跡などが知られ、それらの多くは菊池川を見下ろす台地上に立地します。

特に注目すべきは方保田東原遺跡です。国内唯一の石包丁形鉄器（稲穂をつむ道具）などの鉄製品や、鏡などの青銅製品が多く出土するほか、家の形をした珍しい土器や、交流によって各地から運ばれた多種多様な土器も出土し、それらは国の重要文化財に指定されています。遺跡の内容から、当時この一帯が、この地域の中心的な集落であったことがうかがえます。

また、柳町遺跡からは、弥生時代末から古墳時代にかけての鍬や鋤などの木製農具が多く出土し、米作りが盛んに行われていたことが分かります。同時に「田」という文字が記された木製短甲の留め具も見つかり、発見当時には日本最古の文字として話題を集めました。木船西遺跡の周辺も大規模な集落があったと考えられ、中国鏡の破鏡（鏡を人為的に割ったもの）も3点出土しています。

このような弥生の大集落の長は、次の古墳時代になると、富と権力を背景にして、支配地に大きな前方後円墳を築くようになります。

（担当：和水町社会教育課）

メモ

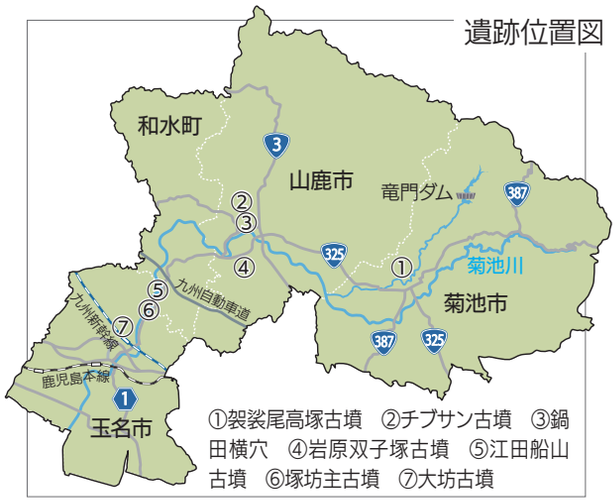
菊池川　日本遺産　検索

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

③チブサン古墳石室



④岩原双子塚古墳全景

銀象嵌入り鉄刀に描かれた馬（⑤出土品）

冠帽（⑤出土品）

菊池川流域、米作りの曙②

古墳時代になると、各地の有力者が古墳を築造しました。菊池川流域でも、米作りなどで富を蓄えた集落の長により前方後円墳が造られ、装飾古墳など独特の文化が形成されました。

岩原双子塚古墳

山鹿市の岩原台地上にある岩原古墳群の中で、唯一の前方後円墳です。墳長約107mのとてもきれいな形で、県内最大級の規模を誇ります。一帯は公園として整備され、熊本県立装飾古墳館が隣接しています。

江田船山古墳

和水町の清原台地上に清原古墳群があり、この地域一帯の歴代の首長墓が並んでいます。その中で最も有名なものが江田船山古墳です。墳長は約62mと中規模ですが、出土した副葬品は冠帽や金の耳飾りなど極めて豪華であり、ほとんどが国宝に指定されています。中でも、75文字が銀で象嵌された鉄刀は大変貴重な歴史資料で、当時この地域がヤマト政権と深い関係をもっていたことを示しています。

装飾古墳群

6世紀になると、清原古墳群の塚坊主古墳を皮切りに、菊池川流域でも古墳の内外に文様を描いた装飾古墳が造られました。装飾古墳文化は流域全体に広まり、玉名市の大坊古墳、山鹿市のチブサン古墳や鍋田横穴、菊池市の袈裟尾高塚古墳などが造られました。約1500年前の彩色は驚くほど鮮やかなものもあり、鍋田横穴の人物像などは、墓の主を守ろうとする思いを今に伝えます。流域の装飾古墳の数は117基で全国一の密度を誇り、菊池川流域の古墳文化を大きく特徴づけています。（担当：和水町社会教育課）

メモ

菊池川　日本遺産　検索

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

条里跡（玉名市）

鞠智城跡

平地に田を拓く（条里跡、鞠智城跡）

条里跡

7世紀以降、日本の政治は天皇中心の仕組みとなります。当時の政府は、国中の土地を同じ広さで碁盤の目のような正方形に区分けしました。この土地区画法を条里制といいます。まず、全国を約60の国に分け、さらに国を郡に分けました。そして郡を6町（約654㍍）間隔で縦横に区切り、縦（南北）の列を条、横（東西）の列を里としました。その一区画を「里」と呼び、それをさらに一辺が1町（約109㍍）の36の正方形に区切り、それを「坪」としました。

菊池川流域の平地部分も同様に条里制で区分けされました。県教育委員会の調査によると、菊池市と山鹿市の菊池川本流沿いの平地、またその支流である山鹿市の上内田川や岩野川沿いの平地、さらに下流の玉名平野の菊池川沿いの平地が条里跡とされています。現在も、上内田川流域と玉名平野には、条里制当時の区画（一辺約109㍍の区画）がそのまま残り、いわば「千年以上の田園風景」が続いているのです。

ちなみに、条里制により土地の場所が、例えば「四条五里九坪」と呼ばれるようになりました。今でも、山鹿市鹿本町や鹿央町などには「三十六」などという数字の地名があり、条里制からの呼び方が残っています。

鞠智城跡

鞠智城跡は東アジア情勢が緊迫した7世紀後半に、唐（中国）や新羅（朝鮮）からの攻撃に備えて築かれた古代山城の跡です。山鹿市と菊池市の境となる米原台地上にあり、現在約65㌶が国の史跡に指定されています。

これまで県教育委員会が中心となって発掘調査が行われ、城門や建物の跡、貯水池の跡が確認されました。また、稲を納めたことを示す木簡や、百済との関連を示す仏像や瓦などが見つかっています。城の周りは谷が入り組んだ複雑な地形ですが、西側の平地には上内田川流域条里跡が広がります。米が得やすく、守りやすい土地であったためこの地に城が築かれたのでしょう。

現在一帯は歴史公園として整備され、たくさんの方が訪れています。

（担当：山鹿市文化課）

ロゴマークが決定

全国から351点の応募があり、菊池川流域日本遺産協議会で次のとおり決定しました。作者は菊池市在住のデザイナー緒方徹さん（54）です。緒方さんは「流域の『ストーリー』に焦点を当て、川と時間の流れを絵巻としてデザインしました。さまざまな文化財を日本昔話風に表現することで、多様な要素がこの流域に詰まっていることを表しています」と話しました。

菊池川流域

菊池川 日本遺産　検索

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

Japan Heritage

築地井手（菊池市）

御宇田井手（山鹿市）

山間に田を拓く①　菊池川流域の井手、御宇田井手（中世の井手）

平安時代の後半以降、山間では溜め池造成や水路建設などの農業土木技術の向上によって、菊池川流域でも井手（用水路）が整備されました。これにより、それまで水が届かなかった高台を水田に変え、耕作面積を増やしていきました。

菊池川流域の井手

井手とは、人工的に造った「農業用水路」のことです。菊池川流域では、井手は中世（平安時代後半ごろ）から造られます。まず水を確保するため、大小さまざまな溜め池を造成するか、川に堰を造り水をせき止め、そこから田に向けて溝を掘っていきます。水を溜める場所が標高の高い場所であれば、そこより低い場所に水を引くことができます。そのため、溜め池や川の堰は比較的標高の高い場所に造られました。場所によっては山を越して水路を通すため、トンネルを掘ることもありました。

菊池川流域の井手は、他の地域と同様に比較的山間に見られます。菊池市には原井手、築地井手、古川兵戸井手などが知られ、山鹿市では御宇田井手、津留井手、小坂井手などがあります。下流の和水町では平野井手、玉名市には寺田井手、河崎井手などが造られています。これらはほとんどが今も現役で、流域の水田に水を与え続けています。

御宇田井手

上内田川の津袋という場所で堰を造り、そこから長さ約4キロにわたり御宇田地区の200ヘクタールあまりの田を潤す井手です。熊本県内で最も古い井手とされています。言い伝えによると、平安時代後期の延長2（925）年、この地域の豪族である御宇田光重が造ったとされます。現在もその偉業をたたえるため、毎年田植えが終わったころに井手の恩恵を受ける関係者たちが「御宇田どん祭り（殿さんまつり）」として祈りをささげています。

なお、堰の近くにある円形の分水施設は昭和30年代に造られたコンクリート製のもので、川から取り入れた水の7割を井手に流し、残りの3割を川に戻すものです。

（担当：山鹿市文化課）

菊池川　日本遺産　検索

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

イデベンチャー

番所地区の棚田

山あいに田を拓く②（原井手、番所地区の棚田）

菊池川流域で行われている稲作の場所は、水田が立地する地表の形態で大きく3つに分けることができます。それらは菊池川上流の山間地、中流の平地、下流の海辺です。今回は山あいでの稲作に必要な水と耕作地を取り上げます。

原井手（菊池市）

原井手は山野を切り拓いて作られた用水路です。この用水路を流れる水が標高の高い土地での稲作を可能にしました。水は高い所から低い所に流れます。この水を広い範囲で利用するためには、高低差のある水路にする必要があります。菊池市原にある原井手は元禄11（1698）年に工事が開始され、3年後に完成しました。この頃になると、測量技術や土木技術が向上し、高い技術のもとに水路が開削されました。

原井手は全長約11キロもある長距離の水路です。この水路で、農業土木技術史上、高く評価されているのが約450メートルの水路トンネルで、肥後藩最古のものです。惣庄屋の河原杢左衛門はこの井手開発に尽力し、その功績を顕彰する記念碑が原井手の北側を通る県道203号の道路そばに建てられています。

きくちふるさと水源交流館では、7月から9月の期間限定で、この原井手を下るイデベンチャーが体験できます。カヤックに乗り、水の流れに身をまかせ、水の流れる音や風を感じることで、井手が作られた当時にタイムスリップした気持ちになれます。

番所地区の棚田（山鹿市）

番所地区の棚田は山鹿市菊鹿町矢谷にあります。「番所」の地名はかつて国境の交通の要所に設置された御番所があったことに由来します。番所地区は八方ケ岳や国見山などの標高千メートル級の山々が連なる筑肥山地の南側に立地しています。棚田は上内田川に流れ込む小さな川が造った深い谷にあります。このような急斜面に水田を造るのは困難な作業です。

谷筋にある山林を切り拓き、斜面を階段状に加工し、上面に平坦な水田面を作ります。階段状の水田を維持するために、水田の側面には自然石を利用した石垣を築きます。

谷全体に広がる棚田と棚田の担い手が住む集落とが調和した農村景観は美しく、訪れる人々に感動を与えます。秋の訪れとともに、頭を垂れた黄色の稲穂が実る水田の周りには真っ赤な彼岸花が咲き並びます。懐かしい故郷の風景は、平成11年に「日本の棚田百選」に認定されました。

（担当：菊池市生涯学習課）

イベント情報

鹿央里やま蓮まつり

岩原双子塚古墳に隣接するハス公園では、約2千年前のハスといわれる大賀ハスをはじめ、約10種類のハスが見ごろを迎えます。

期間　6月下旬～8月初旬

場所　鹿央古代の森交流施設「里やま」古代ハス園

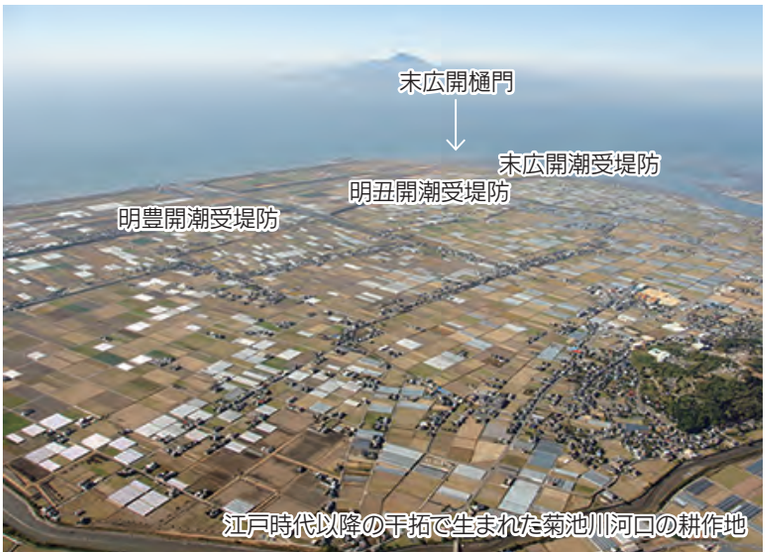
問い合わせ先　鹿央物産館　☎0968(36)3838

菊池川　日本遺産　検索

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～



江戸時代以降の干拓で生まれた菊池川河口の耕作地

末広開樋門（六枚戸）

明丑開潮受堤防

玉名干拓の歴史と干拓施設

菊池川河口付近では、上流から流れてきた土砂が堆積し、広大な干潟ができていました。その部分を耕作地とするため、江戸時代から昭和42年まで干拓が断続的に行われ、多くの干拓地が開かれました。干拓の地割もほぼそのままで、堤防には当時の石積みがよく残っています。

清正公から始まった干拓

加藤清正が肥後にやってきて、玉名の干拓が始まったとされています。その後、細川家による海岸沿いの小規模な開発が始まり、江戸時代後半に熊本藩家老の有吉家が干拓の権利を持つと、その規模は大きくなりました。また有吉家以外にも、手永（村を数カ村まとめた単位）や村で盛んに干拓を進めました。明治時代になると、許可されれば個人による干拓も可能となります。明治20年代から30年代には主に地元の富裕層によって、１００町（約１００ヘクタール）規模の干拓地が次々と築造されました。ちなみにこの時期の干拓の費用は、全て事業者負担です。

江戸時代に始まった干拓は、現在までに約3千ヘクタールに及ぶ耕作地を誕生させました。各時代を通じて干拓地で生産される主な農産物は米であり、地域に大きな利益をもたらしたのです。

今も残る明治の堤防

江戸時代から明治時代にかけて盛んに行われた干拓の結果、玉名市内の各地に堤防や樋門（排水用の水門）が残されました。役目を終えた干拓施設の中で、最も保存状態のよいものは玉名市大浜町の末広開潮受堤防と樋門、玉名市横島町の明丑開、明豊開、大豊開の各潮受堤防。その総延長は、約5・2キロにも及びます。

末広開樋門は、六枚戸（末広開東三枚戸樋門・西三枚戸樋門）と二枚戸（末広開二枚戸樋門）から構成され、特に六枚戸はこの地域で最大級の樋門です。これらの堤防と樋門は明治時代中期に築造されたもので、昭和42年に国営干拓の潮止めが行われるまで第一線の干拓堤防として農地を守ってきました。全国に残る干拓施設の中でも非常に保存状態がよく、干拓の歴史を物語る貴重な歴史遺産であることから、平成22年に「旧玉名干拓施設」として国の重要文化財に指定されています。

（担当：玉名市文化課）

イベント情報

大野下雨乞い奴踊り

玉名市岱明町大野下で古くから行われている雨乞い神事で、奴姿の数十人が天を突き、地を踏み固めて奉納します。

とき　7月最終日曜日
ところ　大野下八幡宮
問い合わせ先　玉名市文化課
☎０９６８(75)１１３６

菊池川　日本遺産　検索

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

↑冨田甚平

冨田式暗渠排水の土管→

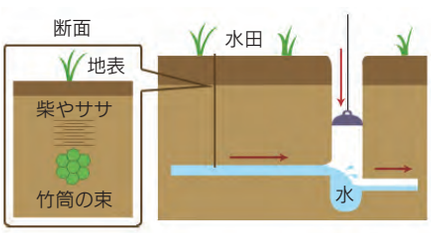
米作りの耕作地を沼地まで拡大することができたのは、土地改良技術の進歩が大きな要因です。その土地改良技術の研究を行い、実践的な成果を上げることに貢献したのが冨田甚平です。

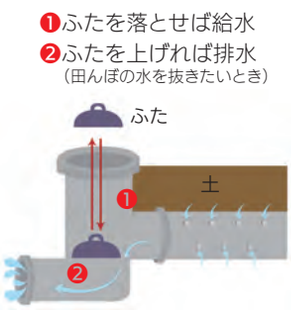
冨田式暗渠排水法

冨田甚平は最初に「留井戸」による地下水位の調節を可能にしました。その後、この方法に改良を加え、「水閘土管」を開発しました。この方法は留井戸よりも小型になり、あぜに設置することができ、工事費も安価にできます。

この水閘土管は排水調節の内ぶたを上から針金で上げ下げをし、簡単で確実な操作ができるようになりました。この方法は排水だけでなく、貯水もできる機能を合わせ持つ点が大きな特徴です。画期的な技術であり、湿田での耕作を可能にしました。

冨田式暗渠排水法





冨田甚平について

冨田甚平は嘉永元（1848）年、菊池郡砦村大字台字水島（現・菊池市七城町）に生まれました。その後、明治8（1875）年から明治10（1877）年まで菊池郡の地租改正担当御用掛を拝命し、地域の土地等級の決定に参画しました。

この調査の過程で、あぜ一つしか離れていないのに土地等級が極端に異なり、収穫量に差があることに気付きます。その原因が主に地下水にあることをつきとめました。

地下水を調節することができれば、等級の低い水田も乾田並みの等級に高めることができると考えます。このことが暗渠排水法の研究の出発点になりました。

（担当：菊池市生涯学習課）

イベント情報

■和水町古墳祭
装飾古墳である塚坊主古墳の一般公開も行います。
日時　▼8月第一土曜日と日曜日
場所　江田船山古墳公園一帯

菊池川　日本遺産　検索

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

❶菊之城跡　❷赤星舟着場　❸菊池の松囃子　❹正観寺　❺菊池五山（a東福寺、b西福寺、c南福寺、d北福寺、e大琳寺）

赤星集落内道

松囃子

米作りによる豊かな文化①（菊池一族）

菊池一族は、平安時代から室町時代後半までの約450年にわたり、菊池地域を中心として活躍した肥後の代表的な豪族です。最も栄えたのが南北朝時代で、15代武光は後醍醐天皇の皇子、懐良親王を征西将軍として迎え北朝方との戦いに勝利し、一時は九州の大半を統一しました。その背景には米による財政基盤があったと考えられます。菊池地域には菊池一族ゆかりの文化財が数多く残っており、その中の5カ所を紹介します。

菊之城跡

初代則隆が菊池市深川に築いた館跡です。周囲の地形を観察すると、一段低くなった箇所（水田）が方形に巡っており、元々は濠に囲まれた館と推定できます。館跡の南側近くには菊池川が流れており、舟運に便利な場所です。

赤星舟着場

菊池川に面した菊之城跡の対岸には、現在、赤星集落があります。集落内には菊池川に向かう細長い道が並行した状態で6本残っています。これらの道は赤星舟着場での荷物の積み下ろし用と考えられ、菊池川岸と交わる場所周辺が船着き場と推定できます。

菊池の松囃子

征西将軍の懐良親王を迎え年頭の祝儀として行われたのが御松囃子御能の起源です。毎年10月13日、菊池松囃子能場で懐良親王ゆかりの椋の大木に向かって能が演じられます。舞が古風で、謡も素朴な要素があり、能の変遷を知るうえで大変貴重であることから、国指定重要無形文化財になっています。

正観寺

15代武光の菩提寺で、菊池五山の中心である臨済宗の寺院です。創建時には3間×4間の建物が建っていたと考えられ、それに伴う礎石が残っており、県指定文化財になっています。礎石の周辺から布目瓦が出土しており、平安時代の創建と想定できます。

菊池五山

菊池一族が京都や鎌倉の五山にならい定めたものです。菊池市内に東福寺、西福寺、南福寺、北福寺、大琳寺の5つの寺院が配置されました。これらは菊池の文教が盛んになる基礎を築きました。

（担当：菊池市生涯学習課）

メモ

菊池川　日本遺産　検索

菊池川流域

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

伊倉に残る中国人商人の墓（四位官郭公墓）

江戸時代の高瀬船着場の様子（復元模型）

米作りによる豊かな文化②（菊池川の水運）

下流の拠点、高瀬・伊倉

菊池川では、古くから船による交通が盛んで、上流から下流まで、地域を貫く人や物資輸送の大動脈として利用されてきました。

室町時代ごろに菊池氏が菊池川全体を勢力下に治めると、河口港である玉名市の高瀬、伊倉を利用して海外との交流が始まります。大陸や朝鮮半島との勘合貿易の拠点となり、戦国時代にはキリスト教の宣教師も訪れ、活発な交流活動が行われました。

加藤清正の肥後北部入国後には、菊池川の流れを高瀬・伊倉ルートから、高瀬・大浜ルートへと変更したことが伝えられています。これにより現在と同じ流路が整備され、旧流路付近は耕作地となり、江戸時代以降盛んになる干拓事業の下地となりました。

近世高瀬の発展

江戸時代になると、年貢米や物資を運搬するため、流域全体で舟着場の整備が進められます。現在の菊池市七城町の高島舟着場、山鹿市豊前街道下町の舟着場、和水町菰田の舟継所などがあり、年貢米は高瀬まで下って高瀬御蔵へ納められました。年貢米はここで厳重に保管・検査され、米市場のある大坂の堂島へと運ばれたのです。高瀬御蔵には、菊池川流域の玉名・山鹿・菊池・山本郡内からの年貢米が納められ、嘉永年間には最大25万俵ほどが集められました。文化年間の堂島への積み出し量は熊本藩全体で約40万俵。そのうち高瀬20万俵、川尻15万俵、八代5万俵と、高瀬で取り扱う年貢米の量が藩内最大でした。高品質と安定した供給量を誇る肥後米は全国各地の米が売買される堂島でも高い評価を受け、熊本藩の重要な収入源となりました。

菊池川水運の整備

江戸時代後半になると、高瀬のさらに下流の晒にも御蔵が整備され、高瀬御蔵の補助的役割を担いました。高瀬と晒には護岸の石垣と俵を積み出した石畳（俵ころがし）が現在も残っています。高瀬や大浜では年貢米の輸送に関わる廻船問屋が多く、水運が盛んになるにつれ町も大きく繁栄しました。

菊池川下流域では、特に江戸時代以降、高瀬を中核とした水運機能が整備され、地域の発展に貢献しました。

（担当：玉名市文化課）

位置図

大浜町外嶋宮蔵絵馬（復元）
菊池川河口に入る廻船を描いた絵馬（奥：大浜町、手前：晒）

菊池川 日本遺産 検索

菊池川流域

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

1 豊前街道の歴史的町並み（山鹿下町周辺）
2 八千代座外観 3 八千代座内観

米作りによる豊かな文化③（山鹿湯町）

菊池川流域では、豊かな米をもとにさまざまな文化が花開きました。山鹿湯町の歴史的な町並みや、芝居小屋八千代座もその一つです

山鹿湯町（豊前街道沿いの歴史的町並み）

山鹿湯町は現在の山鹿市の中心部を指します。町の成り立ちは古く、江戸時代よりはるか前、鎌倉時代の終わりごろにはある程度の町の形ができたとされています。そして江戸時代には豊前街道が整備され、菊池川と街道が交差する場所となりました。川岸には「俵ころがし」という米の積み出し所が設けられ、山鹿周辺で作られた米が菊池川の水運で玉名の高瀬に出荷されました。山鹿湯町は人と物が行き交い、とても繁栄しました。

現在も江戸、明治、大正の建物が残り、情緒のある町並みを見せてくれます。また、豊前街道沿いには造り酒屋、麹屋、米せんべい屋など、米に関係するお店が軒を連ね、地元商店街で「米米惣門ツアー」と名付けたガイドツアーが行われています。

八千代座

八千代座は山鹿市役所近くの豊前街道沿いにあります。明治時代の米問屋や造り酒屋などの経営者（旦那衆）が出資して、町のさらなる繁栄を目指して造られました。

明治43年の建設以来、歌舞伎を始め浪花節などさまざまな催しが行われ、住民に親しまれてきました。しかし、テレビの普及などで次第に公演も少なくなり、昭和40年代後半には閉鎖してしまいます。その後、建物は雨漏りなどが進み、廃屋状態となりました。解体される危機を迎えましたが、それを救ったのが市民の保存運動でした。老人会による「瓦一枚運動」という募金活動などが進められ、八千代座は文化財として保存されることが決定。昭和63年に国の重要文化財に指定され、再び息を吹き返したのです。

平成8年から13年には「平成の大修理」が行われ、八千代座が最も繁栄した大正12年の華やかな姿に復元されました。現在も坂東玉三郎さんをはじめ、著名な歌舞伎役者などの公演のほか、市民のコンサートや発表会など、多くの人に利用されています。また、公演が無いときは内部を公開し、多くの見学者から好評を得ています。

（担当：山鹿市文化課）

イベント情報

■山太郎祭inなごみ

山太郎ガニを味わうお祭りです。

日時 11月中旬の日曜日 午前9時～午後3時
※小雨決行

場所 道の駅きくすい特設会場一帯（和水町）

問い合わせ先 和水町まちづくり課
☎0968(86)5721

菊池川 日本遺産 検索

菊池川流域

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

❶阿佐古かせいどりうち

五穀豊穣を祈るまつり①

菊池川流域では、米の豊作を祈ってさまざまなお祭りや風習が受け継がれています。

阿佐古かせいどりうち

毎年1月14日の夜、山鹿市北東の山あいにある菊鹿町阿佐古地区で行われる行事です。「かせいどり」とは長さ70センチほどのしめ縄に粟の穂を挿した作り物です。

当日の夕方、地区の子どもたちが地元の乙皇神社に集まると、顔を墨で真っ黒に塗りつぶし、かせいどりを持って各家庭を回ります。子どもたちは玄関の戸を開けると「かせいどり、どっさりお祝いな」と大きな声を発し、かせいどりで上がり框を叩くのが習わしです。家の人は子どもたちにお菓子やお餅を渡すと、そのお返しに小さなかせいどりをもらいます。かせいどりは家内安全と一年の豊作を祈り、神棚に供えられます。

この行事は数百年続くといわれていますが、その由来などはよく分かっていません。現在は子どもが少なくなり、伝承が難しくなっているそうですが、地域の子どもと大人が一緒になって守り続けられています。

長坂なれなれなすび踊り

毎年3月の上旬に、山鹿市の中ほどにある長坂地区の厳島神社例大祭で奉納される、五穀豊穣を祈った踊りです。

祭り当日、踊り手たちが午後8時頃から集まって、しばらくお酒を酌み交わした後、10時頃から踊りが始まります。踊り手6人と、どら打ち4人、歌い手10人の合計20人が、神社境内の舞殿で踊りを奉納します。

踊り手は非常に素朴な衣装（白い麻の狩衣）を身にまとい、蓑笠を烏帽子のように被ります。そして、大太鼓の周りを取り囲んで、唄と太鼓に合わせて輪になり、約20分間踊り続けます。神社での踊りを終えると、そこから東へ約500メートル離れた「稔之神」という場所へ移動して、再び同じ踊りを奉納すると行事は終了です。

その歴史は大変古く、中世（鎌倉時代から室町時代）までさかのぼるといわれています。起源には諸説ありますが、念仏踊りや盆踊りから始まったものとされています。

（担当：山鹿市文化課）

❷長坂なれなれなすび踊り

菊池川 日本遺産 検索

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

七郎神大祭（神輿の様子）

七郎神

五穀豊穣を祈るまつり②

七郎神大祭

和水町西吉地で、毎年4月の第1日曜日（または第2日曜日）に行われます。これは地域の神社である七郎神に、男性器を模した神輿が地元住民によって奉納される祭りで、その年の五穀豊穣と子孫繁栄を祈ります。

七郎神は和水町に点在する八つの神様の中の一つで「七郎さん」ともいわれます。祭られているのは、約800年前にこの地域に農耕技術を広め、土地を豊かにしたと伝わる坂梨七郎右衛門です。正治2（1200）年、七郎神の北方にある山森阿蘇神社の創建に伴い阿蘇神社本宮（阿蘇市）から下り、その後この地に留まった人物だといわれています。五穀豊穣の神様として祭られる七郎さんは子孫繁栄にもつなげられ、現在は性と腰の神様として、子宝を望む人や夜尿症で悩む人、足腰を強くしたい人など、県内外から参拝者を集めています。

肥後神楽

県北一帯を中心として、県内に広く伝承されているものです。菊池川流域では現在、52の神社の秋祭りなどで、豊作へのお礼と五穀豊穣を祈願して奉納されています。

舞の構成は数座程度の演目からなり、笛と太鼓に合わせて舞います。手には鈴のほか剣や弓などを持ちます。衣装は手に持つものによって異なり、御幣や榊のときは狩衣、剣や弓のときは直垂を着ます。国津（二天・鬼神）といわれる神楽は、鬼面を付けるのが特徴です。

神楽は主に10月中旬から12月初旬にかけて各神社で奉納されます。神社によって内容は多少違いますが、菊池川流域の神楽は全て肥後神楽に分類されます。玉名市では毎年11月第1土曜日に神楽フェスティバルが開催され、10団体ほどの神楽を見ることができます。

（担当：和水町社会教育課）

平成30年度玉名市神楽フェスティバル。左から、小野尻神楽連（小野尻白鳥神社）の二剣と、玉名神楽保存会（玉名大神宮）の吾段※。
※国津は、玉名市では吾段と呼ぶところが多い。

メモ

Japan Heritage

菊池川 日本遺産 検索

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

大浜外嶋住吉神社年紀祭（水上神事）

櫂伝馬船の両端に陣取る踊り手の剣櫂踊り（左）と采振り（右）

五穀豊穣を祈るまつり③

大浜外嶋住吉神社年紀祭

玉名市大浜町の大浜外嶋住吉神社で約10年に一度開催されていて、次回は2020年5月上旬の予定です。年紀祭が生まれた時代は不明ですが、五穀豊穣のほか、年貢米や農産物を大坂（現在の大阪府）へ運ぶ船の航海安全と、豊漁を祈願するためのものといわれています。数日間に及ぶ祭りのクライマックスは、菊池川の河口をさかのぼる水上神事です。御座船3艘に大漁旗や紅白幕で飾る櫂伝馬船が3艘ずつ連なります。「ホーランエンヤ」の掛け声と、太鼓に合わせたこぎ手の櫂さばき、「剣櫂踊り」や「采振り」は圧巻で、大きな見どころの一つです。祭りが華麗で盛大になった背景には、大浜町が廻船問屋の町として発展し、文化的、経済的に大きな繁栄を遂げたことがあげられます。それだけでなく、海で毎日危険と隣り合わせで生きる人々の、暮らしの平安を祈り、明日への活力を養おうという思いも込められています。

梅林天満宮流鏑馬

馬上から弓矢で的を射る流鏑馬は平安時代から存在し、江戸時代に神事として奉納されるようになったといわれています。玉名市東部にある梅林天満宮の秋季大祭で奉納される流鏑馬は、地元では「ヤクサンドン」と呼ばれて親しまれてきました。11月23日、祭りの世話役を務める節頭の精進小屋入りに始まり、24日には菊池川の水で身を清める汐取りを実施。25日の夕刻に、いよいよ流鏑馬が奉納されます。26日には御神体を次の節頭区へと引き継ぐ節頭渡しが行われ、全神事が終了します。

流鏑馬の矢や的の材料は住民が山野から集めて作ります。農村に伝わる流鏑馬として今なお一連の神事が継承され続けている点が評価され、平成16年に県指定重要無形民俗文化財となりました。

（担当：玉名市文化課）

長さ400mの馬場で３つの的に矢を放つ流鏑馬が３回繰り返される。

汐取りは梅林地区よりも河口に近い下流の小島地区で行われる。

イベント情報

■玉祥寺このみやおどり（菊池市指定無形民俗文化財）

女装した男性2人が、歌に合わせ太鼓をたたきながら踊る独特の民俗芸能です。

日時　2月27日㈬　午後7時

場所　菊池市春日神社境内（玉祥寺423）

駐車場　菊池市玉祥寺公民館

問　玉祥寺このみやおどり保存会

菊池川　日本遺産　検索

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

苗の活着のため土が塗られた土阿弥陀

女装した男性2人が五穀豊穣を願い踊る玉祥寺このみや踊り

五穀豊穣を祈るまつり④

玉祥寺このみや踊り

このみや踊りは、第20代菊池為邦（1430～1488）の頃に建てられたとされる春日神社（菊池市玉祥寺）で、2月27日の午後7時ごろに奉納されます。踊りの起源は明らかではありませんが、約560年の歴史があるといわれています。登場人物は踊り手が2人、見守る人が2人の計4人。見守る人は「御大将」と呼ばれ、どちらに網み笠、腰には頭陀袋、背中に杵を背負った奇妙な格好をしています。踊り手は姉さんかぶりにタスキがけ、化粧を施した女装の男性で、太鼓をたたきながら舞います。

風鎮祭

菊池市赤星地域には、台風前の風止め奉納が伝わっています。水田が強い風をしのげるようにと、風よけのミニチュアの笠と蓑を作り、集落の東西南北に立てた後、神楽を奉納します。自然の脅威に対する稲への愛情に溢れた民俗行事です。

土阿弥陀

菊池市今地区には、苗がよく根付くことを願って田畑の泥を塗られた「土阿弥陀」と呼ばれる仏像があります。胴部全体が泥に覆われていて、頭部は木質が確認できます。表面には白色の上塗りも施されています。

馬つくり

菊池市前川地区、虎口地区、中片地区には、農耕馬の1年間の労をねぎらい、健康を祈るため、年初めにわらや竹で作った馬を地域の各家庭へ配る行事が残っています。馬の素朴な表情に愛らしさがあります。

（担当：菊池市生涯学習課）

馬つくり

風鎮祭のミニチュアの笠と蓑

メモ

Japan Heritage

菊池川 日本遺産 検索

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

川北雨乞い踊り（山鹿市鹿本町中川）

住吉日吉神社雨乞い太鼓（菊池市泗水町住吉）

降雨を祈るまつり①

米作りには、土地と水が欠かせません。現在のようなかんがい施設が整っていない時代、雨不足（水不足）は米の収穫減少に直結していたため、農家にとって死活問題でした。「苦しいときの神頼み」の言葉にあるように、水不足になると人々は踊ったり、太鼓をたたいたりして、雨が降るように神へ祈りました。かつては各地で踊られていたようですが、社会の変化と水利環境の向上などによって、次第に数を減らしています。

今回は山鹿市と菊池市の雨乞い踊りなどを紹介します。

山鹿市の雨乞い踊り

山鹿市北部の山あいには、迫雨乞い太鼓踊り（鹿北町芋生）、相良雨乞い踊り（菊鹿町相良）、小坂雨乞い踊り（小坂）が伝えられています。いずれもはっきりとした由来は分かりませんが、迫は少なくとも180年、相良は300年以上、小坂は500年以上昔からあるといわれています。迫では「明治37年」と墨書きの残る大太鼓が今も使われています。相良は踊り手がほぼ女性で、男装した二人が踊りの輪に加わります。小坂は踊りの形態が古く、念仏踊りの形が変わったものとされています。

また、菊池川に面した平地の集落でも雨乞い踊りが継承されています。宗方万行は山鹿大橋近くの宗方区に伝わる雨乞い踊りで、今から300年以上前に願誉という僧が伝え、その名が訛って「万行」と呼ばれたといわれています。中川橋に近い川北区（鹿本町中川）に伝わる川北雨乞い踊りは、今から約400年前に始まったとされています。かつては地域内のお宮から堤までを移動しながら踊っていたそうです。

住吉日吉神社雨乞い太鼓

花房台地南側にある菊池市泗水町住吉に伝わる住吉日吉神社雨乞い太鼓は、今から約500年前、この地を治めていた合志隆門によって始められたといわれています。

これらの雨乞い踊り、雨乞い太鼓はそれぞれの曲や踊りは異なりますが「大太鼓や鉦（銅鑼）を打ち鳴らす」「浴衣姿の踊り手が蓑笠をかぶる」「輪になって踊るものが多い」など、共通する部分もあるようです。中には踊り手の腰に大きなひょうたんをぶら下げて、こっけいな動きで場をにぎわせるものも見られます。

（担当：山鹿市文化課）

メモ

Japan Heritage

菊池川 日本遺産 検索

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

八龍王神社での大野下雨乞い奴踊り奉納

踊り手は参勤交代時の奴のいでたち

降雨を祈るまつり②

大野下雨乞い奴踊り

この雨乞い奴踊りは、玉名市岱明町大野下の八龍王神社と大野下八幡宮で、毎年7月の最終日曜日に奉納される踊りです。踊り手は白法被姿に陣笠をかぶった江戸時代の参勤交代時の奴のいでたちをしており、手には御幣と「雨降ろう」という言葉を掛けた「フロウ豆」を付けた竹を持っています。

加藤清正の頃（江戸時代初期）、干拓工事によってこの付近には新たに水田ができました。しかし、井手などの用水設備がなかったため、干ばつに見舞われると数日間神社に泊り込んで、雨乞いの祈祷をしていたといわれています。これに太鼓や鉦、踊りが加わり、江戸時代に現在のようなかたちになったと考えられています。踊りの動作には「こぶしで天を突くことで龍神を怒らせて雨を降らせる」「腰を落として足で地を踏み固め、豊作を祈る」という意味が込められているとのことです。

戦前は雨乞いのときのみ不定期で行われていました。しかし、用水設備の普及により、水不足に悩まされることがなくなった現在は、大野下八幡宮の祭礼「総ごもり」に組み入れられ、毎年奉納されています。

米渡尾ひゅうたんまわし

和水町中央部に位置する米渡尾地区に、杉の木をご神体とした「明神さん」という社があり、そこで行われていた雨乞い神事です。祭りでは笛や太鼓を打ち鳴らし、腰の前に付けたひょうたんを回しながら踊って、降雨を祈ります。

以前は7月26日の祭礼時に雨乞いが行われていました。後継者がおらず一時中断されたものの、近年復活し、現在は地区のお祝い事やいろいろな行事の際に、民俗芸能として披露されています。

（担当：玉名市文化課、和水町社会教育課）

地元の祭りで披露される米渡尾ひゅうたんまわし

イベント情報

■高瀬裏川花しょうぶまつり

米作りの恩恵を受け発展した玉名市高瀬地区で行われる、初夏を告げるお祭りです。高瀬裏川沿いをメイン会場に、花しょうぶコンサートなどのイベントを開催。詳しくは玉名市ホームページをご覧ください。

期間　5月下旬～6月初旬
会場　玉名市高瀬裏川水際緑地ほか
駐車場　高瀬大橋下菊池川河川敷駐車場
問（一社）玉名観光協会
☎0968(72)5313

高瀬裏川花しょうぶまつり

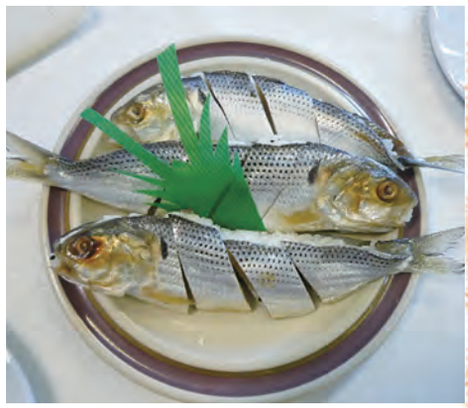
菊池川　日本遺産　検索

菊池川流域

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～



このしろの丸ずし

ガネめし

菊池川流域は太古から米どころとして知られていましたが、一般的に白米だけのご飯を食べるようになったのは戦後のことです。今では当たり前のように食べていますが、かつて白米は祭りや行事、来客へのもてなしの時だけに出されるごちそうでした。菊池川流域には、地元の食材とお米を組み合わせた、地域ならではの郷土料理が数多くあります。

また、菊池川流域では各地で酒造りも行われました。現在も山鹿市、和水町、菊池市に一つずつ酒造所があります。

このしろの丸ずし

菊池川が流れ込む有明海で捕れる魚「このしろ」を背割りにし、塩をかけた後に甘酢で締め、中に酢飯やおからを詰めたこのしろの丸ずし。玉名市や山鹿市で、正月や祝い事の時に食べるもので、玉名市では丸ずし作り体験もできます。

ガネめし

菊池川や支流で捕れるガネ（モクズガニ・山太郎カニ）をお米と炊き込んだガネめしは、ガネが捕れる10月から11月が食べ頃です。和水町で毎年11月第3日曜日に開催される「山太郎祭」で食べることができます。

酒造り

菊池川流域では酒造りも行われてきました。良質なお米と清らかな水を材料とする日本酒は、この地域では現在、山鹿市にある千代の園酒造、和水町にある花の香酒造、菊池市にある美少年の3つの酒造所で造られています。また、菊池市には平成16年に廃業した蔵元の建物が登録有形文化財として保存されています。

花の香酒造（和水町）

赤酒

江戸時代、熊本の酒は、もろみを搾る前に木灰を入れる灰持酒の一種、赤酒だけでした。明治時代になり、清酒と比べて、同量の白米から醸造される量が少ない赤酒は醸造量が減少。戦時中には製造が中止されましたが、戦後に復活。千代の園酒造では現在も赤酒を造り続けています。

（担当：和水町社会教育課）

赤酒

メモ

菊池川　日本遺産　検索

菊池川流域

シリーズ日本遺産

米作り、二千年にわたる大地の記憶

～菊池川流域「今昔『水稲』物語」～

菊池川流域の稲作（干拓地）

菊池川流域産の米

大坂堂島の米相場を左右

江戸時代に貨幣経済が発展していく中で、享保15（1739）年には大坂に堂島米会所が開設されました。ここでは全国各地から年貢米が集まり、米切手を売買することで、米をお金に換えるシステムも誕生しています。堂島では、選ばれた産地の銘柄米を基準として米取引が行われました。「立物米」と呼ばれるこの基準米は、品質はもちろん、安定した供給量などを選考基準とし、売買人の投票で選定されていました。主に選ばれたのは、肥後、加賀、筑前、中国（山口）、広島産の米で、これら産地は競うようにして品質向上と安定した生産に励みました。その中でも、徹底した検査や管理で高品質を誇った肥後米はトップクラスの評価で、菊池川流域産の米は「高瀬口と申すは一番」と言われるまでになり、全国の米相場を左右しました。

明治時代になり、地租改正で米から現金を納める税制に変わっても、米作りは続けられました。近代化の中で人口増も進み、日本全体で米作りがますます盛んになっていきます。

受け継がれる米文化の歴史

戦後の高度経済成長期ごろからは、食の欧米化により国内の米の消費量が低下し、生産量の調整が始まりました。それに伴い、より一層米のおいしさが追及されるようになります。昭和40年代には良質な米作りの推進と米の消費拡大を目指して、日本穀物検定協会が食味試験を開催するようになり、平成元年度には「特A」のランクを設置しました。その中でも、菊池川流域を含む熊本県城北（県北）地区産ヒノヒカリは平成20年度から11年連続で「特A」の評価を獲得しています。日本有数の米どころとして歴史を積み重ねてきた菊池川流域は、今でも全国的に評価されているおいしい米の生産地です。

二千年にわたる米作り文化は、日本の社会・文化そのものを形成し、現在まで継承されてきました。菊池川流域は、その歴史が凝縮され、体感できる地域です。この地に残る米文化と歴史が末永く受け継がれ、発展することを願ってやみません。

23回にわたり、菊池川流域の市町がリレー形式で連載したシリーズ日本遺産は今回が最終回です。ご愛読ありがとうございました。

（担当：玉名市文化課）

イベント情報

■**住吉日吉神社川祭り・雨乞太鼓**

午前中に川の平穏を願う「川祭り」を、午後からは降雨を願う「雨乞太鼓」を奉納し、1年間の豊作を祈願します。雨や川などの自然と向き合いながら営まれてきた民俗行事です。

とき　7月下旬の日曜日

ところ　住吉日吉神社

問菊池市生涯学習課

☎0968(25)7232

Japan Heritage

菊池川　日本遺産　検索